

# human

No246

2012/10

医療を通じて人と人とのふれあいを広めるために  
ヒューマン(人)と名付けました。



「東北支援キャンペーン(福島の桃)」

救急指定・労災指定病院	さくら総合病院	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129 (0587)95-6711(代)
老人保健施設	さくら荘	愛知県丹羽郡大口町新宮1-96 (0587)95-6722
訪問看護ステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8623
ヘルパーステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8026
居宅介護支援事業所	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8027
デイケアセンター	御 嶽	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129(さくら総合病院2F) (080)5294-5728
有料老人ホーム	太郎と花子	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10 (0587)95-0111



<http://www.ijinkai.or.jp>

E-mail: [info@ijinkai.or.jp](mailto:info@ijinkai.or.jp)

## 趣味

院長 小林 勝正

よく人は「お宅の趣味は？」と尋ねる。そんなとき気取って言うならば音楽鑑賞とか絵画鑑賞と答える人もいる。さて、それでは自分はどうかというところ、確かにある種の絵画鑑賞や彫刻鑑賞もするが、やはり究極は車である。車の認識はステータスとか憧れとかいうものではなく、あくまでも生活の道具としての認識で乗ってきた。私の車に関する歴史は幼少期に遡る。たぶん長男に与えられた木製のレーシングカーが私に渡った時には、もう既に前輪はなかった。私の記憶によると、鯉節のような木の塊に、やはり木製のタイヤが後輪に付いたもの。これを畳の上で転がすことから始まった。こうした幼

少期の印象は、今のような玩具がありふれている時代と違い非常に強烈な印象で、後の私に影響を与えたのであろう。医学部に入学して直後の18歳の夏休み、自動車免許を取得すべく自動車学校に入った。当時は名古屋市の北区中切町に愛知県の試験場があった。この試験場はプロのトラックドライバー等も一発勝負で受験するため、非常に難関と云われたものだ。因みに母親はこの学校で運転免許証を取得した。母親の同級生が名古屋で1番目の女性ドライバー（非常に美人であった）であり、母は名古屋で2番目の女性ドライバーとなった。この難関を当時、女性ドライバーとして突破できたのは母の大きな胸に原因があったと母は自慢していた。事実、母が運転を止めていて警察官に車を止められても、「えっ！女だ！」と何度となく女

性ドライバーが故に、ニッコリ笑うだけで多くの違いが許されたという。私はというと、庄内川の橋の袂にある民間自動車学校へ通った。18才であり若さのゆえに全ての課程をクリアし仮免許運転まで進んだ。当時の路上運転はいい加減なもので、教官が助手席に乗るが、「走れ！飛ばせ！」という強い指示や、「そこで止まれ、美味しそうなスイカがなっている、ちよつと待っておれ。」等と、路上講習がいかにもこちらがはばかりのような実習であった。当時父は、イギリス車、アメリカ車等乗り継いだり、どこから手に入れたのか助手席にブレーキペダルが付いた教習所の車を手に入れてきたものだった。そんな車を拝借して大学に通った。まだ名古屋の錦通が舗装されていなくて桜通のみが舗装されていた時代である。夜間しつこく付け回す後続

車を振り切ろうとして思いつきアクセルを踏み込み、猛烈な勢いで走った。それにも拘わらず後続車は更にしつこく追いかけてくる。負けてなるものか！と更にアクセルを踏み込み相当のスピードになった時、後続車の屋根に赤ランプが点灯しサイレンが鳴った。パトカーに捕まった最初の経験である。当時の運転免許証は紙製であり、短冊のような折った紙の部分が長く付いていた。その短冊のように折った紙の部分は、違反を起こした時に警察署でゴム印を押され、違反内容が記載されるのである。私の免許証は、その白紙の部分が全てゴム印で埋まった。駐車違反、スピード違反、一旦停車違反、右左折違反など全ての違反でゴム印を押された。最終的に名古屋市西区の交通裁判所に出頭を命ぜられ、「被告は……」と呼ばれたのも、この時が初めてである。

罰金を納めて、この「被告」は釈放されたが父には「刑務所に入って日当いくらで働いてこい。その方が薬になる。」と言われた。名神高速が一宮から栗東まで開通した。早速ポンコツコナ(バリカン型と云われた)で走ってみた。時速80kmで走るのがやっとで、がんばって直線道路で瞬間100kmまで出して感動していた。そんな私の車をしり目に、あつと言う間に走り去った車があった。ジャガーEタイプである。当時でも180kmで走る車だから、いかに早かったか。JRの在来線と新幹線の差である。ホレボレして見ていた。このジャガーは、後に知ることになるが、御園座の長谷川社長と亀末廣の吉田さんが二人でイギリス旅行に行った際、購入したものである。御園座がセダンを、亀末廣がスポーツカーを買ったという。そのジャガーEタイプを目撃したのであった。大

学卒業の頃には多少おとなしくなつてトヨベツト・コナGTに乗っていた。新婚旅行から帰つて来た時に、自分の車はアパートの駐車場に無かつた。日赤の研修医であつたため、2年上の兄に電話し「俺の車を使っているか？」と尋ねたら、「そんなもの知らん。」と言われた。そこで初めて車が盗まれたのを知つた。この盗難車は3か月後に仙台で発見された。犯人も仙台で捕まっていたので仙台に行き、警察の許しを得て留置場で犯人に「馬鹿野郎!」と言つてやった。しかし車はもう乗れるものではなく、そこで父の勧めにより初めてカブトムシに乗つた。父は第2次世界大戦に参戦し、ドイツを戦友と意識していたのでドイツ車を気に入つていた。当時の車にクラーは無く、暖房機のみである。特にドイツ車は暖房を重視した車であつた。この車を持って横浜に

引越し、国立がんセンターへ通うことになった。通勤は東横線の電車で十分で、しかも週末しか自宅へ帰らないので、この車は妻のものとなつた。週末に東横線日吉駅に降りると妻がこの車で迎えに来ていた。後部座席にはベビーカーにしばられた息子がよだれ掛けをベタベタにして坐つていた。人の顔を見ると父親と認識するの「カー」と笑つた。「ニコリ」ではなく「ニカー」である。歯が無いのでこんな笑いになつたのか、今ではそのあどけない顔もヒゲヅラになつてしまった。2年目になると通勤が必要なので、私は中古車を買ふことになつた。何故、通勤に車が必要か?始発より早く出勤し、終電より遅く帰宅するためである。

そんなとき丁度、東京芝浦のヤナセで中古車のオークションがあるという情報が飛び込んだ。行つてみると10万円、25万円、50万円、80万円と中古車が並んでいて、希望の中古車の番号札を入れるのである。希望者が多い場合、抽選で当たつた者がその車を買えるというシステムであつた。一番最低価格の10万円のフォルクスワゲンはドイツからの直輸入ものであつた。非常に古い車であつたためチェンジャーは市バスのように長く床からニョッキリと立っていた。座席はカビ臭いかに古めかしい車であつた。しかし直輸入のため左ハンドルであり当時としては珍しく後部座席のリヤウインドウが2つに分かれていた。こんな安い車には多くの人が希望の札を入れるであろうと、オークションの待ち時間をドキドキしながら待つた。さて、入札をオープンしたら、このカビ臭い車を希望したのは私一人であつた。係の人からは軽くあしらわれ「どうぞ持つて

て下さい。」と言われた。この車を手に入れて気が付いたことは暖房が壊れていることだった。昔のフォルクスワーゲンは暖房と言ってもエンジンの周りの暖かい風を水道管のような管で車内へ引き込むだけである。水道栓のようなものが付いていて、それを回そうとしたら錆び付いていて全く回らない。早速購入したヤナセに修理を頼み、春先であるがやると暖房が入るようになった。ところがこの水道栓がまた錆び付き、初夏になっても暖房が止まらない状態になってしまった。室内の暑いこと！馬力も小さく、中原街道を通って首都高速の入り口が見えたら、思いっきりアクセルを踏まないとその坂道を登りきらないような車であった。更に悪いことには運転席の窓を開けるハンドルが故障しガラスの上へ下げは文字通り「手動」となった。首都高速の料金

精算する係の人が非常に不思議な顔をして私を見たのは、未だ印象的である。ただこの車の便利なのは、塗装が古く全く光らないため洗車の必要が無かったことである。こうして2台の車のオーナーとして東京時代を過ごした。アメリカでは車に疎い夫人が新しい車に乗り、故障しても自分で直せる旦那がポンコツ車に乗るといふ。我が家の場合も同じようなパターンであった。

名古屋へ帰ってきてフォルクスワーゲンの2人乗り「シロツコ」という車を買った。真赤な色をした非常にきれいな小さな車であったが後に警察の人に聞くと赤い車は、最も彼らがマークする色だそうである。研究生活をしながら、無給のために知多半島まで走って行き生活費を稼いでいた。当時、知多半島道路の立体交差の下には常に白バイが待機し、高

速道路を尋常ではない速度で走る車を捕まえていた。ある冬の寒い日、高速道路下でじっと止まっている白バイを見つければ、「可哀そうだから少し運動をさせてやろう」と、思いっきり車を走らせ、バックミラーとサイドミラーで白バイが追いかけてくるかどうかを確認した。全く白バイの姿は見えない。「なんだ、この程度の速度では白バイにマークされないのか」と思った途端、あの白バイ特有のけたたましいサイレンが真後ろで鳴った。どこからどう入ったのか、私の車の死角に瞬時に入り込みスピードを合わせたのである。運転席の窓を開け白バイの警察官の「免許証を拝見」という言葉に、「さすが見事だねえ！」という感動の言葉しか出なかつた。いくら相手を褒めても違反切符は切られた。自分自身では、このまっ赤なフォルクスワーゲンが非常に気に入って

いて、いつもピカピカに磨いていた。ある時、ヤナセの人から「先生、もうそろそろ小さい車をやめて安全な大きな車に乗ったら。」と言われた。本当のところはヤナセが売ろうとしたアメリカ車が一年近く売れ残っていて、これを私に売ろうとしていたのだ。V8の大きなエンジンを積み、バンパーはビルのH鋼と同じ太さで頑丈そのものであった。誰も乗らないのが納得できた。この車に乗り換えて一か月後、正面衝突の事故に合った。場所は国立名古屋病院の前、ロータリーとなっていて一方通行路。私は市バスと並行して走っていたら突然、前方から逆走した日産サニーが現れた。彼は「衝突する！」と思った瞬間、市バスより小さい私の方を選んだのであろう。私としては相手がサニー、しかもこちらは大きいアメリカ車、「来るなら来い！」

と思つた途端、まともに正面から衝突した。相手はグチャグチャ、こちらはバンパーに少し傷ついたので、幸い人身事故にはならず物損事故だったが、相手は地方の現職警察官だった。現職警察官が違反事故を起こすと処分が大変だそう。そこで私も問題とはせず、恋人を乗せた他府県の警察官を許す気になった。

その後、大口町で開業し、その忙しさのために名古屋から通勤することになった。当時の東名神高速道路は3か月に一度くらい頻度で死亡事故が発生し、時間を問わず呼び出された。岡崎警察から夜中に電話が入り、「首が飛んだので、首を付けてもらえますか？」などの依頼をされた。東は豊川ICの東、宇利トンネルの手前まで、西は岐阜羽島インターまで出向した。大口クリニックの頃には覆面パトカーで迎えに来て

くれたが走行性能はとび抜けていた。病院から出て41号線へ出る信号を回つた途端に100kmだった。さすがに忙しい最中に人を呼び出すのだから申し訳ないとの気持ちがあるのだろう。「一宮インターの先です。」などと云うが、西へどんどん走って結局、岐阜羽島ICでの検死となった。「夕方の診療に間に合うかなあ？」と言つたら、「走ります。」と言つて赤灯サイレンで高速バス停の中を160kmで通り過ぎたのには驚いた。警察に協力するだけではなく、「ここ大口のクリニックで救急医療の必要が生じた場合、名古屋ICにパトカーが待機し先導してもらつて大口まで走つたものだ。やくざと同じような黒塗りのキャデラックに乗つていたことがある。全長5.7メートルのフルサイズのキャデラックで名古屋市内を走るのには楽だった。大きな交差点で右折レーンか

ら急に左折しても、誰もクラクション一つ鳴らさない。この黒塗りのアメリカ大統領が乗るような車は、「ド迫力」であった。名古屋ICからパトカーの先導で赤灯サイレンで走るパトカーにピタリとくっついてキャデラックを走らせた。途中に一般車両が割り込むと非常に危険なためである。春日井ICを過ぎるころは直線が多くパトカーもスピードを出さず。私も負けじとスピードを出したが、そこで気付いたのはアメリカ車は170キロでスピードリミッターが作動し、それ以上の速度が出ないことである。パトカーがスピードダウンし、こちらの車のスピードに合わせしてくれるという屈辱を味わつた。その時は私は決心した。「いつかはベンツでパトカーを抜いてやる。」その思いがその後2、3年後に成就し、パトカーの加速に負けな

いベンツに乗ることができた。高速走行をしながらクラクションを鳴らすのは、どんな変化をもたらすのか？多くの人はこの現象を知らないであろう。あのベンツのクラクションの震動板が高速の空気抵抗で破壊され、トーフ屋のチャルメラの笛になってしまふ。「パーパー」と鳴るクラクションでは誰も気付かない。パッシングライトの操作は方向指示器のバーを手前に引くことによる。このパッシングライトを使い過ぎると、方向指示器のバーが根元から折れるのを御存知だろうか？「どけどけー！」とばかりにパッシングライトを照らし高速を走つている時、「パキッ」と乾いた音がして方向指示器のバーがハンドルのシャフトからぶら下がった。幸い小牧ICからは病院まで直線なので方向指示器の必要が無く、なんとかなつた。但し修理するヤナセの人には、「ごんなの初めて見た！」と

言われた。皆さんご存知の如く、名古屋ICと春日井ICの間には速度取締装置、いわゆるオービスが設置されていて、速度違反の車輛はパッチシ写真が撮られる。ある時、パトカーの先導で夜間オービスのところを通過した。警察は要領を知っているのだからオービスを通過したと同時に猛烈に加速する。猛烈に加速したパトカーを見て、私のベンツも猛烈に加速した。そしたら赤外線ランプの独特な赤い閃光を浴び、バッチリ写真を撮られてしまった。1か月後、愛知県警から呼出状がきて高速隊へ出頭した。もちろん救急医療のためにパトカーの先導があつた訳だから無罪放免となつたが、その時の隊長から先導したパトカーの運転手が呼び出され、「お前、先生が写らんように、なんで先導せん！」と怒られていたのが痛快であつた。病院から往診に出てい

た時のことである。病院から電話が入り「東名高速で奥さんが事故に合つた」とのこと。「春日井の救急車が当院まで運ぶとのことです」。この連絡が入った時、いつもの高速道路での事故の情景が目に浮かんだ。と同時に「再婚？子供はまだ小さいし困つた。」と期待とも困惑ともどちからとも言えない気持ちで急ぎ病院へ戻つた。春日井の救急隊に言わせると「車輛は前後ぐちゃぐちゃ、4トン車に追突され即死と思ひました」とのこと。さすがベンツで、運転席は確実に確保され、運転席のドアが開き、運転手は無傷であつた。事故車輛を回収したヤナセも、これ程破壊されたベンツを見たのは初めてだとのことであつた。確かにホイールのベンツマークを見ないとどんな車か全く解らない。2週間後に同じ場所でも同種事故が起き現場で炎上、運転手は焼死した。ベンツ

との差をはつきりと思ひ知らされた事件であつた。その時以来、私の再婚の夢も消えた。救急医療のためや警察活動の協力でパトカーに先導されたり、パトカーに同乗したり、救急車の助手席でマイクを握つたりしてきた。しかし何と言つても「自分で赤灯を点灯し、サイレンを鳴らして走りたい。」との気持ちは誰しも持つ夢ではないだろうか？早く現場へ着きたいの一般車輛が邪魔でもどかしい。警察庁は法改正により、医師が救命のために限定付でドクターカーでの緊急走行を許可した。早速私はこの許可を申請した。過去からの流れで愛知県警も協力してくれて申請はスムーズに許可された。この1年後、県立多治見病院のドクターカーが許可されNHKで大々的に放送された。私はマスコミへの売り込みが下手である。しかしこの

多治見のドクターカーは、鳴り物入りのデビューにも拘らず頓挫した。憧れの赤灯サイレンを手に入れたものの、いざこれを使用する際の緊張は極度の緊張を強いられる。今や憧れなんてものではない。パトカーを運転する警察官ですら、運転手と助手で確認し合いながらの走行である。これを一人で同時に行うのは経験した者にしか解らない程、困難なものである。ある時、現場検死でパトカーに乗つた。「死者は高齢者？」「高齢者です」と警察官。この検案書を書く時に年齢に気付いた。死者は私より5つも若かつた。この高齢者がいくら好きと言つても、今日も赤灯を点灯しサイレンを鳴らし、緊張して運転している。皆様の御協力と御理解をお願いいたします。「ウーウーウー」。そのうち自分の声が「ウーウーウー？」となりそうです。

## 循環器内科とわたし

名古屋大学医学部附属病院 循環器内科  
由良 義充

皆様、初めまして。2012年4月よりご縁があってさくら総合病院に勤務しております由良と申します。毎週水曜日の外来と病棟業務を担当しています。今回は、循環器科や私自身のことについて書く機会を与えていただきました。

さてそもそも私の専門としている循環器科について、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。肺や気管支の病気を扱う呼吸器科、消化管や肝臓の病気を扱う消化器科に比べるとややイメージが湧きにくいかと思います。循環器科とは全身への血液の循環を管理する科、簡単にいうと主に生活習慣病、不整脈、狭心症を扱う科です。検診で生活習慣病を指摘された方、また動悸・息切れ、胸の痛み、呼吸の苦しさなどを感じられる方はまず循環器科を受診してください。

私が循環器を志望したきっかけは、大学5年生にさかのぼります。病院実習に行った先の救急外来に激しい呼吸困難で意識も悪くなった患者が運ばれてきました。病院到着後も状態はどんどん悪くなり、血圧が下がってきて周りに緊張が走りました。そんな中、循環器ドクターが登場し、心臓超音波検査などの検査を速やかに行い、状態を把握して薬剤治療が開始されました。結果、重症患者がものの30分もたたないうちに改善し、会話を始めたではないですか!その時、私は安堵したとともに、非常に驚いたのをよく覚えています。このように循環器科は全身の血液の循環に関するトラブルを的確に診断し治療するスペシャリストです。

そんなところから循環器への憧れが始まり、様々な循環器疾患をみるにつけ、幅の広さ、奥深さのとりこになりました。1枚の心電図や心臓超音波検査写真から読み解く多くの情報、カテーテルインターベンションの繊細かつダイナミックなところなどが循環器の魅力です。重症の方を担当したときには何日間も病院から帰れないこともあり、体力的にも精神的にもきついですが、それを補って余るほどのやりがいがあります。またこの分野は近年、内服薬、治療デバイスの進化、膨大なエビデンスの蓄積により目覚ましい発展を遂げ、以前は手の施しようがなかった疾患が現在では少ない負担で治療可能となりました。ただし、まだまだ克服すべき問題点を抱えていることも事実です。現在も臨床研究、基礎研究が絶え間なく行われており、それがひとつひとつ社会に還元されていくこととなります。

いろいろと書いてきましたが、私自身は臨床、基礎ともにまだまだ未熟です。今後も社会貢献すべく、自己研鑽にいそみたいと思っています。よろしく願います。何かありましたら、お気軽にご相談ください。

## 第19回 「健康を守る教室」

テ — マ：「排尿とは?～ひん尿・失禁～」&セラバンドを使用した体操  
日 時：平成24年10月27日 土曜日 13:00～14:00(受付12:30～)  
場 所：新館1F  
講 師：泌尿器科 藤井泰普医師 理学療法士 磯村  
参 加 料：無料  
お問い合わせ：受付窓口もしくは医療連携室  
Tel 0587-95-0015



排尿はみなさんにとって毎日おこなっている当たり前の行為です。日常生活に関わることなので障害が生じればその苦痛は計り知れないのではないのでしょうか。今回は排尿(主にひん尿・失禁)について原因や症状そしてその治療方法を中心にお話します。生活上の大切な排尿について一緒に考えましょう。奮ってご参加ください。

※健康を守る教室の体操コーナーでおなじみのセラバンドを健康教室終了後に下記価格で販売をいたします。ご希望の方はお申し出下さい。 黄色(弱)400円 緑色(中)460円 青色(強)520円

# 診療科表

平成24年10月1日現在

午前 9:00~12:00

午後 5:00~7:30

月	消化器科 外傷 センター		心臓 循環器 呼吸器 総合内科 センター		運動器 形成 センター		脳卒中 脊髄 センター		神経 糖尿病 感染症 センター		ストリス 外来		子ども女性疾患 センター		ペイン クリニック センター		皮膚疾患 センター		耳鼻・ 喉疾患 センター		腎・尿路 疾患 センター		目の 疾患 センター	
	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	
月	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
火	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
水	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
木	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
金	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

- ※1 休日あり ※2 休日診療あり(9:00~11:00)
  - ※3 第一週10/4は休日診療となり 10/11より診療開始となります
- 診療時間は、診療科目により異なります  
 ● ご不明な点がある場合は、職員にご確認ください  
 ● 診療日が変更になる場合があります。ご了承ください

機関紙 発行 医療法人 医仁会 電話 0587(95)6711(代)  
 human ヒューマン さくら総合病院 発行年月日 2012年10月1日  
 No.246 丹羽郡大口町新宮1-129 発行部数 350部